

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520131

研究課題名(和文)新旧美学における基礎概念の研究

研究課題名(英文)Study of the basic concepts in old and new aesthetics

研究代表者

佐々木 健一(Sasaki, Ken-ichi)

東京大学・人文社会系研究科・名誉教授

研究者番号：80011328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：美学は大きく変貌しつつあり、基礎概念の見直しが不可欠である。今回は特に創造概念を考察した。

自動詞的变化を旨とする日本の伝統思想の中に、創造の場所はない。この概念は、いくつかの思想伝統を原資とし、西洋近代を主導する役割を担ってきた。その到達点がロマン的思想で、創造を主要な価値と見做し、天才や靈感を語って藝術に独占的権利を認めた。20世紀になると、藝術も大きく変化し、科学・技術の重要性が高まって、知的な創造概念が台頭してきた。しかし、知的発想のなかにも身体的契機がある。創造的行為は産出と判断の2契機からなり、知的なものを含め産出は身体的、判断は頭脳的である。身心の緊密な相関が創造の鍵を握る。

研究成果の概要(英文)：Aesthetics is radically changing and a revision of its basic concepts is indispensable. This time, I focused on the problem of creativity.

In the traditional thought of Japan, which is based on the intransitive notion of change, we find no place of creativity. Continuing some traditional trends, the concept of creativity constituted the very core of the modern thought of the West. Its main arrival point was the romanticism, which regarded creativity as the basic value of human act, and insisting on genius and inspiration, attributed it almost exclusively to art. Passing to the 20th Century, with new style of art and the importance of science and technology, an intellectual notion of creation became dominant.

As to its structure, however, creativity cannot be exempted from the physical moment. Creative act consists of production and judgment, and the former (including intellectual one) is physical, the latter mental. Intimate collaboration of body and mind constitutes creative act.

研究分野：美学藝術学

キーワード：美学 創造性 近代 自動詞性 ロマン主義 20世紀 科学・技術 身体

1. 研究開始当初の背景

(1) イギリスの放送局BBCが専門家を対象に行ったアンケートによって、20世紀の最も重要な芸術作品とされたのは、マルセル・デュシャンの『泉』(1917)である。既製品の便器を購入し、タイトルをつけて展示しようとしたもので、制作せず、美を狙いとしていない、という点で伝統的芸術とは全く異なる。20世紀において最も重要というのは、芸術のあり方を根本的に変換させるのに決定的な影響を及ぼした、ということである。

(2) 芸術のあり方がこのようにラディカルに変化すると、芸術哲学としての美学もまた、大きく変わらざるをえない。芸術の形態のうえでデュシャンの影響が広く一般化したのは20世紀後半のことであり、それを追って美学も「伝統的な美学」からの逸脱を顕著に見せるようになる。この新しい美学は、新しい問題を提起し、美学的諸概念の書き換えを伴っている。これらを前提として初めて、現今の美学的思索は可能となる。

2. 研究の目的

(1) 当初の目的は、1995年に刊行した拙著『美学辞典』の増補改訂である。美学の25の基礎概念を取り上げて、概念史を略述し、問題点を議論したこの著作は相当に流布してきた。しかし、その基本的観点を近代美学に置いていたために、現代の新しい美学の問題意識とのギャップが徐々に大きくなってきたし、古い美学像を標準的なものとして示すという悪弊も見られるようになった。そこで、新しい諸問題を取り上げ、現行の論述を更新することを構想し、少しずつ遂行している。

(2) 4年の研究期間中に、新たな課題が膨らんできた。上記(1)に含まれる主題だが、創造性概念について、『美学辞典』とは独立した著作をなすべく、この2年間は集中してきた。この概念は、近代美学の中核をなすものだが、現在では、科学技術を中心に文化現象全般に広がって用いられている。この全体を包括する議論を展開するのが、第2の目的である。

3. 研究の方法

目新しい「方法」はない。部分的には古典を含むが、主として新しい研究書を読み、現代の研究者たちの問題意識をとらえ、それを踏まえて議論を組み立てることである。

4. 研究成果

(1) 「美」「芸術」「自然美」「想像力」「表現」「解釈」などについても、新しい文献を中心に研究をすすめているが、論考としてまとめることをしていない。ここでは、集中して取り組んできた「創造・創造性」につ

いて、その主要な論点を枚挙することにした。

(2) 「創造」の語史・概念史 日本語では19世紀後半になって初めて現れ、発明の意味で用いられた。伝統思想のなかにこの概念がないのは、日本の文化が「なす」ではなく「なる」の文化だからである。ラテン語には単に「作る」の意味の *facere* とは別に、「かつてないものを作る」の意味の *creare* という動詞があり、神の世界創造に適用された。この概念はルネサンス以降、人間の活動に適用されるようになる。「近代」とは純粹に人間的な文明だが、「人間の力で平和な社会を築く」というホップズ的な課題に応えたものが2つある。芸術と産業・経済活動だが、両者を貫く指導原理が「創造」である。創造の哲学はロマン派において結晶する。それは創造を芸術にのみ認めるものだが、産業に資する発明や科学的発見を度外視したのは、産業化が劣悪かつ非人間的な環境を作り出したことと関連している。また、ロマン主義が靈感や天才を語って創造概念を神秘化したこともよく知られている。20世紀になると、芸術自体変貌して知的な性格を強め、発明や発見の創造性の解明が進む。今日の「創造」はこれらを含めて考えるべきもので、理的・産業的な創造が社会に与えるインパクトは極めて大きい。また、「クリエイター」というカタカナ語が示すように、創造の価値意識は広く普及している。

(3) 「創造」の意味 ロマン派的なバイアスを解消するうえで顕著な役割を果たしたものに、コリングウッドの芸術哲学がある。かれは、“create a noise”(酔っ払いなどが「騒音をたてる」)や“create a nuisance”(新しい娯楽施設が周囲に「厄介を引き起こす」)のような言葉づかいに基づいて、“to create”が意思による行為で、責任を伴い、予めの計画を必ずしも要さないという特徴を挙げた。特にこの第3点は、創造が製作とは異なる要点である、ということをかかれは強調している。しかし、芸術は迷惑と同じか、という反論が起こるのは必定である。コリングウッドが目した騒音や迷惑行為は負の価値しか持たず、これらを目的語とする「創造する」は価値の契機を含まないが、芸術や「発明」においては価値の契機が本質的である。もうひとり、ブリックマンの言語分析がある。かれは「シェフが新しいスープをmakeした」と「createした」を比較し、後者はレシピを考案したという意味であるところから、創造は個物を産出するのでなく、アイデアを生み出すことだ、と主張した。この説は、20世紀のアヴァンギャルド芸術が観念的・概念的な性格を強めている状況と適合しており、注目される。ただし、新しいレシピを考案したシェフが、そこに到達するのに、何度も味見を繰り返した、という

事実を等閑視することはできない。すなわち、そのレシペ=アイディアは「靈感」のように、一挙に与えられるわけではない。

(4) 創造の諸相 「創造的」とされるのは、作物（あるいはアイディア）、人、仕事（の仕方）の三相にわたる。作物あるいは成果が「創造的」であるためには、新しさと価値が不可欠である（騒音やトラブルとの違い）。発明や新商品であるなら、relevance（社会のニーズへの適合）を語るのが適切である。創造的なひとは、ロマン的な「天才」が典型で、その神話的な（言い換えれば実態を逸脱して理想化された）性格は、批判されて久しい。創造性を仕事のあり方に求めるのが、理論としても生産的である（誰にも関わりのあるものになる）。事実、多くの理論的考察がこの主題に捧げられてきた。古典的な説としてウォレスの4段階説を参照することができる。準備段階、懐胎期間、ひらめき、具体化。4分の3が「ひらめき」までの段階に充てられていることから明らかなように、これは具体的作業ではなく発想の理論である。人びとが注目してきたのは、「懐胎期間」である。は問題意識をもつこと、は到達点で、一見単純な事実のように見える。それに対して懐胎期間とは、一度懐いた問題を忘れることであり、忘れながら知的作業が水面下で進行して「ひらめき」に到るのであるから、謎をはらんでいて、解明の意欲を刺戟してきたわけである。この謎とは、創造の現象と結び付けられる神秘性のイメージや、無意識の役割（ロマン主義者たちの麻薬の神話、フロイトの心理学、ベイトソンの暗黙知）に関わっているのだから、創造性の理論の核心がここにある、と見られるのも不思議ではない。

(5) 手と頭脳、あるいは行動と判断 ことの当然として、懐胎期間を観察することはできない。発明や発見については多くの証言があるが（ポアンカレやアダマールがその代表）、それらは、どのような状況で「ひらめき」が得られたかという説明である。しかし、そのひらめきのメカニズムは、（コリングウッドやブリックスマンが無視した）手作業のメカニズムであり、それはN・ウィナーが解明したフィードバックの仕組みそのものである。ひとの仕事は、いわば手と頭の（あるいはそこに目を加えて）相関作用から成り立っている。手がなにかを作り出すと、目を通して頭がその良し悪しを、そしてどこを修正すべきかを判断する。その判断に従って次の作業を行う。その過程を際限なく繰り返してゆく（ちなみに、この仕組みはコンピュータの演算プロセスと通じており、コンピュータによる創造の可能性という問題につながる）。創造的な作業が並みの作業と異なるのは、良し悪しの判断が精密になっていることである（それに対応して「行動」も精密にな

る）。無意識に展開しうる部分も、この同じ作業がなされていると考えられる（課題に対するさまざまな解決案が出され、それについて判断がなされる）。それどころか、何かに問題意識を懐くことも、何かをきっかけにひらめきを得ることも、同様の仕組みと考えられる。エジソンの名言、「天才とは1%の inspiration と、99%の perspiration である」とは、このことを捉えた言葉である。

(6) 「発見」の重要性と集団的創造の可能性 以上のように考えると「判断」の契機の重要性が分かる。手の「行動」を精製するのも、判断の繊細さだからである。キリスト教の哲学者のなかに、神の創造と区別して、人間のそれを invention と呼ぶひとがいる。普通、発明と訳されるこの語のものの意味は「発見」である。創造を発見と呼ぶのは、判断の契機の重要性によることである。また、創造のメカニズムを産出の行動とその結果の判断という2拍子のものとして捉えるとき、集団的創造の可能性が見えてくる。「手」の役割のひとつ、「頭」の役割のひとつを分けることができるからである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計7件)

Ken-ichi Sasaki, La beauté embellissante, Nouvelle Revue d'esthétique, PUF, 依頼原稿、2014/2-No.14, pp.101-113.

佐々木健一、自動詞性の詩学、哲学、依頼原稿、三田哲学会、第132号、2014、pp.1-29.

佐々木健一、コンディヤックの美学 感覚論的文章論について(下)、精神科学、査読あり、第52号、日本大学哲学会、2014、pp.37-69.

Ken-ichi Sasaki, Perspective East and West, Contemporary Aesthetics, 査読あり、vol.11, 2013, Web journal (<http://www.contempaesthetics.org/newvolume/pages/article.php?articleID=670>)

佐々木健一、コンディヤックの美学 感覚論的文章論について(上)、精神科学、査読あり、第51号、日本大学哲学会、2013、pp.1-31.

佐々木健一、デイドロと画家たち、精神科学、査読あり、第50号、日本大学哲学会、2012、pp.21-59.

Ken-ichi Sasaki, the Faculty of Feeling, Diogenes, 査読あり、

No.233-234(Vol.59, issues 1-2), Sage, pp.21-31; (フランス語版 *Le feeling* ou la faculté de sentir, Diogène, No.233-234 (Jan.-Avr. 2011), PUF, pp.30-44.)

〔学会発表〕(計7件)

佐々木健一、風の詩学、中国社会科学
学院人文研究所、2014年3月27日

Ken-ichi Sasaki, Socially Engaged
Body—A Body-Mind Notion in Ancient
Japan, Symposium “Learning to Be
Human”, 北京大学、2014年3月27日

Ken-ichi Sasaki, Poetics of the
Wind, XXIIIth World Congress of
Philosophy, University of Athens, 2013年8
月8日

Ken-ichi Sasaki, Philosophical
text: Work or Communication, XXIIIth
World Congress of Philosophy, University
of Athens, 2013年8月8日

佐々木健一、エレメントとしての宗
教 または宗教音楽の宗教性、第63回日本
音楽学会全国大会クロージング・シンポジ
ウム、西本願寺聞法会館、2012年11月25日

佐々木健一、こころの哲学、日
本大学哲学会、日本大学文理学部、2012年
10月27日

Ken-ichi Sasaki, Feeling, the 1st
Polish-Japanese Meeting, Aesthetics and
Cultures, Jagiellonian University in
Krakow, 2011年5月23日

〔図書〕(計2件)

佐々木健一、論文ゼミナル、東京
大学出版会、2014年、254ページ

佐々木健一、ディドロ『絵画論』の
研究、中央公論美術出版、2013年、972ペ
ージ

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木健一 (SASAKI, Ken-ichi)
東京大学・大学院人文社会系研究科名誉教
授
研究者番号：80011328

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：